

## 銀賞

設備にとっての「町医者」になるために

マツダ株式会社 本社工場

高岸 祐輝

私は組立ラインで作業をしているとき、故障した設備を修復する保全の人を見て「設備にとっての医者だ」と思っていた。この頃オペレーターである私は設備を修復するのは保全の仕事、私は医者にはなれないと考えていた。

私は2年前からラインの安全や品質を確保するため、また稼働を向上させるために改善を行う業務に就いている。当初は、改善を行うためにロボットや電気回路の勉強に励んでいた。上司や先輩から私の力量をそれなりに認めてもらい、新規で設備を立ち上げるプロジェクトに参加することになった。設備の仕様や構造を決めていく中で、先輩から「設備を管理していくうえで大切なことは何だと思う」と聞かれ、私は即座に「保全性です。故障した時に保全の人がいち早く修復できるような仕様が大切だと思います」と私は答えた。「確かにそれも大事。しかしもっとも大事なのは故障しない設備にすること、保全だけでなくオペレーターが管理しやすい設備にすることが大事」と私に告げ最後に先輩は「設備にとって身近な存在はオペレーターだ」と言った。

その話を聞いた後、私は自分の考えを見つめ直し設備を修復させるのは確かに保全の役割の1つである。しかし、それ以前に設備を故障させないために日々管理を行うのはオペレーターの役割であると考えられるようになった。それから私は設備の造り込みを行う中でオペレーターが設備にとっての医者になれる方法を考えた。人は体に大きな不調があれば治療を行うために大きな病院に行く。しかし、日々健康に過ごすために体のメンテナンスを行うのは最寄りの行きつけの病院だ。その方が自分のこともよく把握してくれていて、その人に合った診察をしてくれる。だから、私はオペレーターが「町医者」になれる仕組みを作ろうと考えた。

私は「町医者」になるための仕組みを考えていく中で「設備がオペレーターに伝える」ということを意識した。当然人と違って設備は話すことはできないがランプやブザーを使ってオペレーターに伝えることはできる。私は「設備がメンテナンスをしてほしいとき」や、「設備が異変を感じたとき」に、オペレーターへ伝える仕組みを設備に織り込んだ。具体的には、設備のメンテナンスを

終えた後に、設備モニターのメンテナンス完了ボタンを押すだけでその日を記録し、その設備の稼働状況に合った次のメンテナンス時期に警報を出すという仕様だ。また、メンテナンスを行う際、モニターに重点清掃個所やグリス給油個所を表示し、オペレーターがどこをどうすればいいのかをひと目で分かるように工夫した。私なりの設備のカルテだ。

完成した設備を運用する職場へ仕様の説明を行った際に、オペレーターの方に「とても管理がしやすくなる、ありがとう」と、言ってもらえた。私はこの設備のカルテを各設備に水平展開した。各職場から「メンテナンスしやすい」という声と同時に、「設備に関わる消耗品も使用回数で交換時期を知らせてほしい」とオペレーターの方から相談を受けた。その時、私は「まるでお薬がなくなるから新しく処方してもらいたい」と心の中で思いオペレーターに「町医者」の姿を感じ、とてもうれしくなった。

これからさらに自動化が進んでいく中で、安定した生産を行うためには、オペレーターが設備を管理していくことが重要になる。私は、そのためにもオペレーターが管理しやすい仕組み、良き「町医者」になれる仕組みをこれからも構築していくために、さまざまな課題へ挑戦していく。